

戦時における機能主義デザイン——工芸指導所の戦時期的実践とその位置

森 仁史 *Hiroshi MORI*

はじめに

戦争の現代的形態たる総力戦では、前線だけでなく銃後との物心両面にわたる一体となった戦いが必須となる。日本の場合、理念としては天皇制イデオロギーをふりかざし、物質的には資源節減と高度国防国家建設のスローガンを掲げて実践された。本稿はこうした状況下で商工省工芸指導所の輸出拡大や生産近代化という戦争とは矛盾する方針がどのように変容したかを追跡し、その活動の軌跡に戦争がどう表象されたか、またこれらの活動から戦後の展開がどう準備されたかを考察しようとするものである(一)。とくに合理性の追求という極めて普遍的な主題が著しく日本的な様相のもとで追求されるとき、デザインが歩んだ道程になにが読み取れるかを検討してみたい。

産業革命が産みだした工場制生産により、ものの製造は飛躍的な量的拡大を可能とし、その進展は次に生産の合理性をシステムとして追求するようになる。これは資本主義社会における自動車製造のライン生産システムに始まりバウハウスの如き機能主義の実験にとどまらず、スターリン主義体制下での計画経済においても国家的課題となった。そして、一九三〇年代の日本でも統制経済の名のもとに追求された^②。

この課題を日本で最初に実践したのは型而工房である。一九二八年（昭和三）一〇月に結成された型而工房は部材の規格化や楕材や金属といった目新しい素材による家具設計に邁進した^③〔図1〕。それは基本的にバウハウスの実践の援用とその日本の変容として進められたものだったが、
 同人の期待ほどには需要がなく量産に至らず実験に留まった。同じ年三月仙台に創設された商工省工芸指導所は「我国在来ノ工芸的手工業ニ対シテ、工業ニ関スル最新ノ科学及技術ヲ応用利用スルコトヲ指導奨励シテ、其ノ製品ヲ海外市场ニ輸出スルニ適当ナラシムルコト」^④を目標として掲げた。つまり、工芸製造の科学的改良と伝統技法を輸出振興へつなげるための試作研究の二つを主要な活動の基軸とした。一九三三年（昭和八）、初の指導所研究試作品展覧会〔図2〕を三越本店で開き、ここに九月来場したB・タウトは出品に対し手厳しい批判を加えた。これがきっかけとなってタウト自身

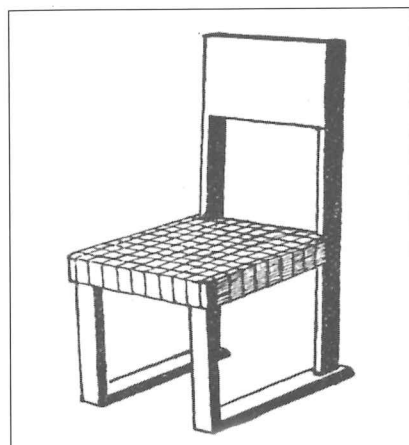


図1 《型而工房標準型2号》

を招聘することになり、指導所における機能主義の実践は大きく進展することになった。彼の招聘の発意が所長レベルでなく、商工次官吉野信次からであったことは商工省官僚の現状打開への強い意欲を物語っている^⑤。國井所長はむしろ伝統技法の近代化に重点をおこうとしていた。

一月一日来仙したタウトは一日付で「国立仙台工芸指導所の創造的發展に対する提案並びに發議—プログラム—」をまとめ、これが二〇日頃に印刷されて所員に配布された^⑥。ここでタウトは「工業的生産のための規範原型の近代的製作」を提案する。タウトは検討対象として家具（椅子、机、戸棚、化粧台、衣裝箆筒、寢台、ソファ、屏風、遊戯台）、電気照明器、インク壺、家庭用品を挙げた。さらに「仕事の行い方」として設計、試作、委員会チェックという手順を提案した。これがデザイン改良として極めて包括的な提言であり、その実行のための助手として通訳の東北大学助手鈴木道次のほか、若手職員から福岡和雄、劍持勇、岡安順吉、緒方侃（後、豊口克平が追加）が選ばれた。招聘が三ヶ月と短期間であったため、タウト滞在中にはその一部にしか着手できなかったのは当然であった。



図2 工芸指導所試作品展より 1933年

実際タウト離仙後はこの実験を維持することにも大きな困難が伴った。一九三四年（昭和九）度の研究試作テーマの八件のうち二件が規範原型であったが、一九三五年（昭和一〇）度には二三件のうち一件となっていた⁷。剣持ら若手と寺坂毅部長、安藤良美ら中堅が國井所長に共同して対抗することで、なんとか試作研究が持続されたというのが実態であった。この間に山口文象事務所から機能主義を理解できる藤井左内が着任したことはこの推進にとって有利となった。指導所では小椅子・テーブルランプ（一九三四年）、休息用椅子（一九三五年）、家具（一九三八年）の規範原型試作がほぼ先のタウト提案に沿って実施された⁸。これ以外に試作されたものにはドア・ノブがある⁹。

一九三四年にはその「傍系的調査」として標準寸法が発表され、方法として単位家具・組合せ家具（ユニット家具）の日本の実現が模索されていた。照明器具の体系はようやく一九三四年（昭和九）九月に発表されたが、¹⁰ 椅子の規範原型¹¹が発表されたのは翌年一〇月であった¹⁰。「経済性、実用性、能率性」の追究のうえに整理棚、書机が発表されたのは一九三八年（昭和一三）になった。これには生産性と規格性に優れた合板の使用が設定されているが、まだ日本では実用化には程遠かったのでその製造方法（接着剤、成型技法）もまた研究課題であった¹¹。研究の遂行には課題ばかり多く、その完成には程遠い状況であった。

これらは総じてドイツで探究提案されていた国際標準の日本への適合態を見出す作業といえる。指導所スタッフにとつては、文献上で知りえる範囲を超えて、その実施プロセスと方法を学べたことがタウトを招いた大きな成果であり、その後の工芸指導所にとってはより意義が大きかった。すでに一九三二年（昭和七）にはE・デイクマンの著作『家具構成』¹²を『工芸ニュース』誌上に紹介し、「世界のリズム」と「一致結合」することを主張し¹³、彼らは機能主義への飛躍の準備を整えていたのだ。

タウトが教えたのは第一には試作を重ねるプロセスの実際であった。工場と設計者が試作製作を二〇回程度繰

り返し、最終的に「美的センスを持ち合わせた人々から構成された委員会」の審査を経て規範原型として採用すべきだとした。こうした厳しい切磋は指導所に技能重視から実際の良質品製作への路線転換を促した。第二に、タウトはこの規範原型の提案と同時に「近代製製品は、古代の伝統的日本文化のように、ある課題の解決のための最も単純な方法を見出し、この単純さからその典雅な形式を発展させることによって、近—古の結合（現代の諸条件と伝統的に純化されて来た日本文化との結合）を形成することができる。そうすることによって国際的生産競争においても日本の典型的なものを示すことができる。」ことを強調している¹⁴。これは世界市場への進出を日本の伝統を抛りどころにして果たそうとするものであり、タウトが滞日後半に盛んに論じたテーマである¹⁴。ある思念を伝えるための図というデザインの原義からすれば、造形が生み出されるに際して基づくべき理念があ



図3 《規範原型卓上照明1B》



図4 《規範原型小椅子C1》

るはずであり、タウトはこの造形と思想との不可分を説いたのであった。そして西欧模倣からの脱却を模索していた日本デザインはまさにこれによってその端緒を掴んだのあった。タウトは合理性と自己表現の発露を併せ内包するデザイナーであったので、こうした日本人の欲求にはまことに好適な感覚の持主であった。つまりは、タウトの影響は日本の必要であったのだ。タウトはここで機能主義の合理性が普遍的な原理として優位にあることだけでなく、それが日本の個性を獲得することで世界的評価をも獲得できることを示唆したのだ(16)。これはインターナショナルスタイルがじつは伊勢神宮の簡素な造形に通底するのだという日本の建築家の主張に相通じるものであり、剣持はインテリアにおいてそれを実践しようとして着想した(17)。ただし、それは一九三〇年代においては指導所内の試作実験のレベルでしかなく、いわば研究者の想念のなかのできごとであった。

二 輸出振興から規格化へ——国民家具の登場

明治以来、日本が固有の技芸や特産品を輸出振興の柱としてきたのは周知の通りである。指導所にあつては國井所長はこの「固有工

芸」路線の継承者であった。この流れが戦時にはどのような立場を得るのかは機能主義の帰趨を反面から規定するわけでもあるので、ここで一通り概観しておきたい。日本の国際収支は一九三六年(昭和一一)以降悪化を続け、その対策は商工省にとって緊急課題であった。商工省は長くデザイン振興の柱であった商工省展を一九三九年(昭和一四)の第二五回展をもって廃止し、一九三三年(昭和八)から始めていた貿易局輸出品展と併合し、新たに工芸品輸出振興展を発足させた。同年『輸出工芸』が創刊された。これは三七年(昭和一二)に設置された商工省貿易局の所管であり、この年ドイツからT・P・シュレーマン夫人が招聘された(18)。この年六月に大蔵省で作成された「当面ノ経済的政策要綱」では「(一) 国際収支ノ適合外国為替ノ管理」が「(三) 物資の調節」に先んじて掲げられ、経済政策の目標とされていた(19)。その後、杉田禾堂(一九三七年欧米)・宮下孝雄(一九三八年ヨーロッパ、北南米)、高村豊周(一九四一年メキシコ、北米)が各国市場調査、輸出振興のため海外に派遣された。一九四一年(昭和一六)には勝見勝が「海外工芸事情調査及翻訳に関する事項」を担当するために派遣された。一九四〇年(昭和一五)のC・ペリアン招聘もこの路線のうえに発想されていたものであり、ペリアンは日本の帰路、一九四一年七月に日本軍が南仏印に進駐した直後の一二月に、ハノイで開かれた日本工芸展の展示構成を担当したので(20)、彼女の日本での制作作品が出品のメインとすることは至極当然といわなくてはならない。この展覧会の出品構成は国際文化振興会が関わり、西村伊作の家具、河井寛次郎・浜田庄司の陶芸作品、大倉陶園・日本陶器・安藤七宝・御木本真珠の輸出工芸品といったものが展示された。日本国内の自由主義派が推進した路線が伺える。ペリアンの日本での制作作品もここに展示される予定であったが、会期には寝椅子しか間に合わなかったようである。この展覧会には指導所から谷内治橋が出席し、同展への関わりの深さを示している(21)。しかし、仏印進駐は決定的な対米英緊張をもたらし会期中に日米開戦が伝えられ、そもそも物資の輸出入は途絶を余儀なくされた。



図5 ディクマン『家具構成』



図6 B. タウト《置時計》1935年

こうして、輸出振興展は一九四一年（昭和一六）の第三回展を最後に開催されず、一九四〇年（昭和一五）七月に奢侈品等製造販売制限規則、いわゆる七・七禁令が施工され、輸出振興は実質的に不可能となってしまう。代わって登場するのが高度国防国家の実現ための生産合理化への具体的取り組みであり、これは機能主義の国家政策への登用にほかならなかった。一九四一年四月には生活必需品資統制令が公布され、翌年六月に指導所は商工省企業局傘下で統制、規格化の任務を果たすべく位置づけられた。

このなかで、一九四一年七月二三日付で商工省は一〇月に東京と一月大阪高島屋で国民生活用品展を開催するべくその要綱を事前に発表し、「戦時経済ニ即応セル国民生活用品」を目標に掲げ、「生活用品関係産業者ニ比ノ根本指導方針ノ徹底ヲ図リ生活用品関係産業者ニ此ノ新方針ノ下ニ振興シ之ヲ確立セシメル」とし、間接的に製造業者を指導することを狙った。これらの一般出品のほか指導機関からも出品が予定され、ここに工芸指導所の試作家具が出品された⁽²⁰⁾。こうして指導機関内部の研究ではなく、製品規格化が政治課題として要請されてきた。七月二五日には商工大臣官邸で審査委員の懇談会が開かれ、「商店標準型として普及すべき」（陸軍経理局長）とか「この際寧ろ標準型を定める位にして欲しい」（海軍省）

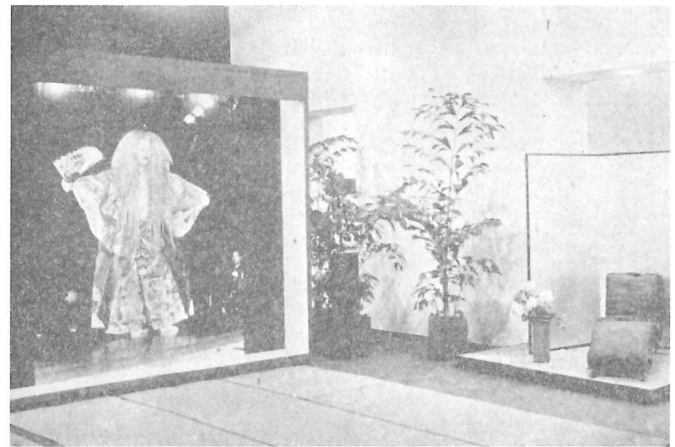


図7 日本工芸展 [ハノイ市グラン・マガザン・レユニ]

などとしてこうした課題の政策としての緊急性、重要性を求めている⁽²¹⁾。こうして一九四一年二月の日米開戦の前後には、戦時における模範設計として提示すべく工試型国民家具⁽²²⁾が発表され、続いて一九四二年（昭和一七）に茶箆筒、茶器整理箆筒、衣服整理箆筒、洋服箆筒、食器棚、玄関家具が発表された。これらは先に進められてきた規範原型と同じ担当者によって推進され、これまでの試作研究の研究開発に漏れたタイプの家具を補うものであり、いわば規範原型の拡充と看做すことができる。この工試型国民家具⁽²³⁾の基本は規範原型と同じくユニット家具であり、設計の手法と方向にはいささかの転換もなかったと見ることができ。時代の要請は異なっても、規範原型と国民家具は発想が同一なのである。それは規範原型と名称が異なるばかりで、国家施策が生活用品戦時規格として、かつて先端であった標準化の実験に迫り着いてしまい、機能主義デザインは完全に戦時の資源節減、戦力増強に組み込まれたことを物語っている。一九三九年（昭和一四）末には国民服の製造に被服廠が先鞭をつけ、これら規格化はより拡大強化すべき情勢にあったのだ。このなかで、四二年には指導所の技術職員は一四名と大幅に増員されている。また、他方でこの年に指導所は豊口克平（台湾）、小池新一（華中、華北）、山脇巖（南京）らを日本支配地域に派遣しており⁽²³⁾、戦時体制のもとで必要な技術研究はむしろ強化されつつあった。



図8 染色展示 [同右]

一九四三年（昭和一八）三月三越で開催された第二回国民生活用品展では、「日常生活ヲ規正、合理化スルト共ニ、簡素ニシテ明朗健全ナラシムル」ことに「一層ノ工夫」が求められた。ここに出品されたのは「生産規正及び消費規正の上」に於ける規格化」であり、「資材と労力をできるだけ節約した戦時標準規格型」となった⁽²⁴⁾。さらに会場では、住宅営団設計の二号型（建坪七坪半）が原寸でつくられ、そこに指導所が試作した家具を置いて、極めて具体的に国民に戦時の暮らしが提示されたのだった⁽²⁵⁾。これは最小限住宅の日本的姿というべきであるが、さらにその理念が八項目からなる「戦時「住ひ方」心得」なる提言に示されている⁽²⁶⁾。

1. 神棚、仏壇を正しく祀る事、
2. 部屋の使い途を明確にする事、
3. 整理、整頓、清掃に努める事、
4. 部屋は配置を適正に、使ひよい物を数少なく持つ事、
5. 遊んでいる空間を充分利用する事、
6. 防空、退避の備へを怠らぬ事、
7. 家庭工作を心掛けて、なるべく自製、修繕に努める事、
8. 簡素美と床しい嗜みを忘れぬ事

ここで、先ず最初に機能主義的合理性ではなく天皇制イデオロギ



図9 《国民家具筆筒》



図10 第2回国民生活用品展より

ーが総てに優先することが示され、また新たに合理的家具をつくるより、現状をどう整理するかに力点が置かれている。最後の項目にこの提言が機能主義デザイン理念をかるうじて保持しており、この組合せと順列がどこから発展、登場してきたのかを自ずと語っている。こうした動向のなかで一九四二年（昭和一七）、東京に本拠を移した指導所では、剣持ら規範原型担当技術者たちが機能主義的な事務用家具（平机ほか一六種）を設計した。また、一九三三年（昭和八）から始めていた解体家具の研究はこの年《現地向解体家具》⁽²⁷⁾として発表され、官庁家具規格化が一九四三年秋にはようやく本格化した⁽²⁸⁾が、いずれも規範原型の研究陣によつて担われた⁽²⁹⁾。

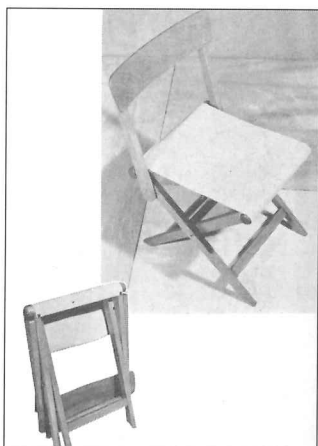


図11 剣持勇ほか《折畳小椅子》

こうした合理性追求は造形に潤いを欠かしたくないデザイナーの志向とはほんらい対立するものである。國井は一九四一年（昭和一六）夏にはまだ「造形が国民精神に及ぼす影響—即ち美の問題を忘れては完全なるものは出来ない⁽³⁰⁾」と主張できた。しかし、一九四三年一月には社団法人大日本工芸協会が創設され（会長吉野信次）、これまでの主要な工芸諸団体である帝國工芸協会、日本輸出工芸連合会、道府県工芸協会などが総てここに吸収され、解散した。國井は指導所長を退き、同会理事長に就任した。この会は「芸術保存又ハ技術保存ヲ要スル工芸品等ノ生産、販売、輸出ニ付時局ニ即応シタル綜合的指導統制ヲ行フ」ことを目的とした⁽³¹⁾。こうして指導所のみならず工芸総体は戦時生産の一部として組み込まれていく。さらに商工省、文部省、情報局、大政翼賛会のイニシアチブのもとに、五月には大日本工芸協会は日本美術及工芸統制協会へと統合され、このなかに第四部会（工芸美術）と第五部会（産業工芸）として組み込まれることになった。同会は「皇国文化ノ精華タル美術及工

芸技術ノ保存並ニ振興ヲ図リ、之ガ製作、販売、交易等ニツキ国家目的ニ即応シタル綜合的指導統制」を目標とし⁽²⁹⁾、さらに戦争継続のためのイデオロギー・プロパガンダの役割を担おうとすることになる。

國井に代わった齋藤所長は就任にあたって新しい事業方針を所員に配布した。齋藤は方針に先ず「技術報國」を掲げ、事業実施要領において従来の研究テーマを「急速ニ解決処理スベキモノニ限定」し、それらの係長を次のように任命した⁽³⁰⁾。

- 一 木工技術の科学化(寺坂毅)、二 軽合金の加工(松崎福三郎)、三 金型工作(豊口克平)、四 漆及塗装科学(安部郁二)、五 作業用設備器具の合理化(剣持勇)、六 国民生活用具の規格化(中山修二)、七 軍用需品(松崎福三郎)、八 支那及南方工芸(齋藤信治)

製造技術の近代化合理化と製品の規格化が四分の三を占めており、指導所が戦時に何を課題として要請され、意識していたかを見てとることができる。これらの人材は規範原型の研究の時期に若手技術者であった層であり、指導所の戦時体制への移行はこうした人々が研究推進の中心となることを急速に推し進めた。その結果、テーマとしての機能主義が組織全体の課題となったのである、同時にそのデザイン思想は生活や個性ではなく全く国家への奉仕に置き換えられ、いわば思想なきデザインがデザイナーの職域を延命させることになった。

一九四四年(昭和一九)には航空機機体部品の木製化が試作研究⁽³¹⁾の大部分を占めることになり、この中心を担ったのが剣持勇であり、バウハウス出身の山脇巖がその協力者であった⁽³²⁾。ここではもはや純粹に軽量化と耐久性に対する合板、接着の技術開発と達成期間の短縮が至上課題となり、またその開発が技術開発機関としての工芸指導所の存続を保障することにもなった⁽³³⁾。こうして機能主義デザインは技術とその開発手順に解

体され、軍事技術開発の一翼に組み込まれることになった。

三 デザインの空虚とその継承——戦中から戦後へ

デザインの技術と手法がこうして国家戦略とそれに奉仕する技術へと再定義されることによって、一方で機能主義デザインのもたらす重要性への認識が生まれると同時に、他方でもそれ自体を突き動かす固有の理念をデザインから剥奪するのを容認することになった。この換骨が戦後日本のデザインが一九三〇年代までのドイツ風な機能主義から、戦後は急速にアメリカ的なスタイル重視へと急速に転換する素地を用意したことになるのだらう。つまり、ものが成り立つに際する固有の核を抜きにして、その外皮としてのデザインを消費することで次々と新しさを取替えていく路に抵抗なく突き進むことができたのだ。

一九五〇年代に工芸指導所は日本にインダストリアル・デザインを根付かせようと熱心に啓蒙活動に努めた⁽³⁴⁾。このこと自体が自ずと戦前期には日本にインダストリアル・デザインが不在であったことを明かしているが、戦前の指導所の機能主義実験はやがて産業として実行運営されるべきだというのは当然の帰結でもあった。しかし、戦時というきわめてドラスティックな外圧にさらされるなかで、デザインを空虚な規格化、合理化に限定し、唯一天皇制イデオロギーによってその実行を支えることにしたという前提を見逃すことはできない。敗戦によるこのイデオロギーの否定は次に来るものを自在に受入れ可能な状態にすることができ



図12 《操縦座席》1944

たのだった⁽³³⁾。

こうしたデザインの思想的空虚はそのなかで自己形成した剣持がイサム・ノグチやイームズというアメリカで体制を越えてデザイン思考を展開する人々を見出したとき、失われたデザイン思想の再生への可能性と方法を再び確認することになるのだ。しかし、タウトによって開かれたアイデンティティを再び取り戻すことは指導所が戦時に捨ててしまったものを再建することにほかならず、指導所の戦後の活動はもはやそうした後戻りを許さなくなっていたため、剣持は指導所を離れるほかはなかった。また工芸指導所（一九五二年（昭和二七）—産業工芸試験所）が切り拓いた戦後デザイン思潮のなかで、彼の営為は当然孤高の道を歩まねばならなかったし、反対に多くの無自覚はやがて戦後復興・高度成長からポスト・モダンへと雪崩を打つことになった。そして、我々は現在さらにその後の二一世紀を混迷のなかに迎え、再度デザインに思想を問う意味を考え始めようとしているのだ（図14）。

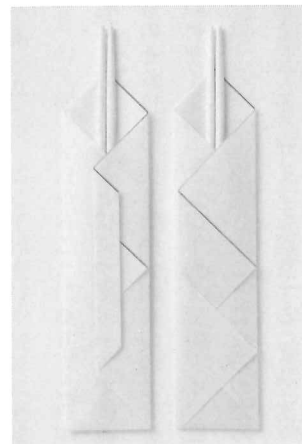


図14 折型デザイン研究所《折型半紙1/2》「箸包み」（「新日本様式」100選より）



図13 インダストリアル・デザイン展示 [1950年日本貿易産業博]

註

(1) この戦後から戦中を貫くテーマ設定について、雨宮昭一「戦時戦後体制論」岩波

- (5) 「剣持自筆日記」（未刊）以下剣持日記と略。一九三三年一〇月七日の条。
- (6) 庄子晃子、鈴木治平「仙台市博物館蔵ブルーノ・タウト指導照明器具四点の復元研究報告ならびに修理報告」『仙台市博物館調査研究報告』第五号 昭和五九年、庄子晃子「ブルーノ・タウトの商工省工芸指導所への提言書」『デザイン学研究』四三巻五号 一九九七年、「剣持日記」一九三三年一月二〇日の条。
- (7) 『工芸ニュース』3-5 一九三四年五月 三三頁（規範原型の研究に基づく小椅子の試作）と「規範原型の研究に基づくテーブルランプの試作」、『同誌』4-6 一九三五年六月 一九五頁（規範原型に基づく椅子の研究及試作）。
- (8) 『工芸ニュース』3-8 一九三四年九月 三十八頁、4-10 一九三五年一〇月 三二六—三二九頁、7-11 一九三六年二月 三十四頁。
- (9) 『工芸ニュース』3-4 一九三三年。
- (10) 『工芸ニュース』8-6 一九三四年六月 六頁、2-5 一九三三年五月 一一頁、3-8 一九三四年八月 四頁。
- (11) 『工芸ニュース』7-5 一九三八年五月 一六八—一七一頁。
- (12) 『工芸ニュース』1-2 一九三二年七月 四—七頁、1-3 六頁。Dickman, E. Moebelbau, Stuttgart, 1930. の紹介である。
- (13) 庄子前掲論文、六頁。

- (14) 建築家としては例えば、剣持が教えを受けた蔵田周忠が挙げられる。剣持勇「規格家具」相模書房 昭和一八年 八頁。
- (15) B・タウト（森備郎訳）『日本文化私観』明治書房 昭和一年。
- (16) 『工芸ニュース』8-7 一九三五年、8-10 四二九頁、『三〇年史』三六頁、『美術年鑑』昭和一五年版 岩波書店 昭和一六年 五—七頁。
- (17) 中村隆英、原朗「資料解説」『現代史資料』四三 国家総動員（1）みずが書房 一九七〇年 xx—xxi頁。
- (18) 『工芸ニュース』7-1 三六頁、10-5 二二六頁、『帝國工芸』12-9 二八〇頁、出原栄一「勝見勝先生のこと」『日本の近代デザイン運動史一九四〇年代—一九八〇年代』工芸財団、『工芸ニュース』10-4 一六九頁。
- (19) 「日本工芸品仏印印度支那陳列会について」『輸出工芸』第九号 昭和一七年八月、『工芸ニュース』11-3 一九四二年三月 一〇四—一〇七頁。
- (20) 『工芸ニュース』10-7 一九四二年八月 二七六頁。

- (21) 『工芸ニュース』 10・8 一九四一年九月 三二〇頁。
- (22) 『工芸ニュース』 10・3 一九四一年三月、11・1・2 一九四二年一月・二月。
- (23) 『三〇年史』 二八〇頁、四四頁、『工芸ニュース』 11・8 一九四一年九月 三八四頁。
- (24) 『工芸ニュース』 12・4 一九三四年五月 一四二―一四五頁。
- (25) 剣持勇「戦時「住ひ方」後記」『生活美術』 3・5 四―七頁、「第二回国民生活用品展概況」『工芸ニュース』 12・4 一二四頁。『生活美術』の執筆から推測すると、この住まい方の筆者が剣持であった可能性が高いように思われる。
- (26) 『工芸指導』 12・9 一九四三年一月 三九四頁。
- (27) 『工芸ニュース』 10・8 一九四一年九月。
- (28) 『工芸ニュース』 12・2 一九四三年三月 五八―六〇頁。
- (29) 『工芸ニュース』 12・5 一五八頁。
- (30) 『工芸ニュース』 12・3 九四―九八頁。
- (31) 『工芸指導』 12・10、13・3。剣持勇、山脇巖、松本文郎「航空機と木材」『航空朝日』 一九四四年一月号。
- (32) 『工芸ニュース』 13・5・6 一九四四年 二八頁。剣持は四四年六月二二日付で軍需省航空兵器総局第一局飛行機課軍需技師を拝命し、山脇も同局技術生産指導業務を囑託された。このほかに工芸指導所からは斎藤信治が軍需省同課に配属された。
- (33) こうしたデザインの姿は戦後社会ではその支配を企業に委ねることによって埋め合わせることになった。しかし、デザインが造形固有の論理を内包するものである以上、ソニーや本田のようにデザイン力を魅力にする企業体が生まれることは阻止できなかった。しかし、トヨタ自動車や松下電器は彼等を少数派に閉じ込めることでデザイン支配を完成させ、そのうえに高度成長を成し遂げた。だが、その綻びとソニー神話の崩壊を二世紀は経験しつつあるのだ。

編者略歴

長田謙一（ながた けんいち）

1948年生。東京藝術大学大学院修了（美学）。首都大学東京教授（芸術学）。主な著書・監編共著に『bauhaus1919-1933』『イギリス工芸運動と濱田庄司』『ダンス!』『斎藤佳三』『歴史展示のメッセージ』『近代日本デザイン史』ほか。科研報告論集『〈美術〉展示空間の成立・変容』（代表）、『戦争と表象／芸術』（代表）、など。千葉アートネットワーク（Wi-CAN）プロジェクト（2003/04/05）代表。

国際シンポジウム 戦争と表象／美術 20世紀以後 記録集

2007年2月28日 初版第1刷発行

編者——長田謙一

発行所——美学出版

〒185-0012 東京都国分寺市本町4-13-12 第5荒田ビル407
Tel 042(326)8755 Fax 050(3552)2081

装丁・本文デザイン——右澤康之

印刷・製本——モリモト印刷株式会社

© Kenichi NAGATA 2007 Printed in Japan

ISBN 978-4-902078-09-1 C 0070

*乱丁本・落丁本はお取替いたします。*定価はカバーに表示してあります。